

新着案内

町田の文学

第42号 2019.5.1 発行 町田市民文学館ことばらんど

新収蔵資料紹介

遠藤周作「共犯者」自筆原稿

—貴重資料収集・整理・保存はどのように行われるか—

この度、当館では新たに、遠藤周作の短編小説「共犯者」の自筆原稿を収蔵することとなりました。この作品は一九六一年「オール読物」の一〇月号に掲載されたもので、のちに『遠藤周作ミステリー小説集』（七五年 講談社）、『短編アンソロジー 患者の

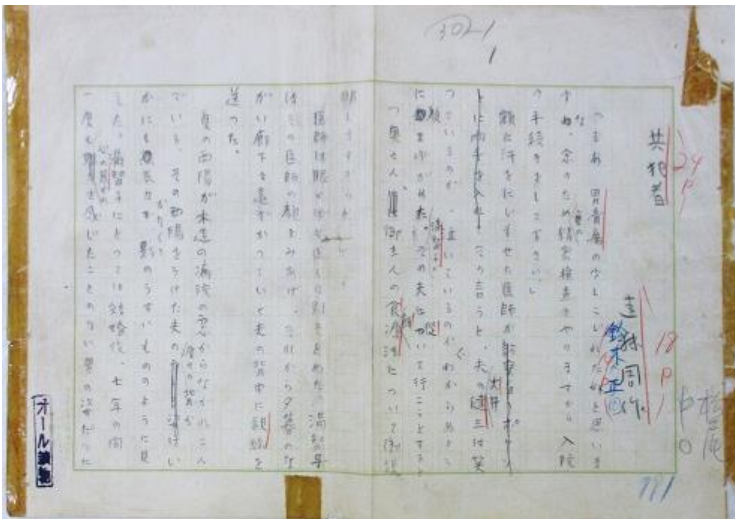
事情』（二〇一八年 集英社文庫）等に収録されています。

今回は、この新収蔵原稿がどのような経緯で当館に収蔵され、どのような整理作業が行われ、今後どのように保存されるのかをお伝えします。

資料を収集し、保存する使命

多くの方が文学館は「町田ゆかりの作家の展示会をやっているところ」と考えていらつしやると思いますが。確かに、ゆかり作家を顕彰する展示会の開催は文学館に課せられた重要な役割の一つで、多くの方の関心を引くところだとは思いますが、文学館にはもう一つ柱となる使命があります。それは、町田の文学の継承のため、ゆかり作家・作品に関する資料を収集・整理・保存すること。展示会とは異なり、利用者の方々の目には見えないところで行われている仕事なので、実際にどんなことをしているのかピンとこないかもしれません。

そこでまず、文学館資料の収蔵環境を簡単に紹介いたします。



遠藤周作「共犯者」自筆原稿
「オール読物」1961年10月号掲載
4月23日～5月12日まで1階サロンにて公開中



貴重書庫・貴重資料保存庫

文学館特有の設備は地下二階にある収蔵庫で、ここは「貴重書庫」、「遺品収蔵庫」、「貴重資料保存庫」に分かれています。いずれの部屋も、温湿度を二四時間体制で管理しています。

「貴重書庫」は、資料をそのままの状態でも年保存するための書庫です。収集対象は町田ゆかりの文学に関する図書・雑誌です。貸出用の装備をせず、函や帯等の付属物も付けた状態で書架に並んでいます。整理に必要なバーコード等のシールは中性紙の帯に貼って巻き付け、資料本体には手を加えないことを徹底しています。これらの資料のほとんどは「特別閲覧」として手続きをすれば、どなたでもご覧いただくことができます。「遺品収蔵庫」には、机や椅子など大型の資料、筆記用具や鞆等の愛用品、作詞家・宮川哲夫のレコード等を収蔵しています。

最後にご紹介する「貴重資料保存庫」は、

外部の影響が室内に及ぶのを防ぐために前室が設けられた特別な部屋で、最も繊細な資料を収蔵するための場所です。環境の急激な変化は資料保存の大敵。当館では紙資料に適した環境として、室温二五度、湿度五五パーセント程度の状態を保つように設定しています。

この部屋には、作家の原稿や手紙などの肉筆資料、絵本の原画、遠藤周作がフランス留学時に蒐集した洋書などが並んでいます。

遠藤周作「共犯者」収集の経緯

さて、この貴重資料保存庫に新たに収集されたのが、遠藤周作の短編小説「共犯者」の自筆原稿です。

資料は、ご寄贈いただく場合もありますが、今回は古書店から購入しました。当館では、貴重資料については町田にゆかりのある文学資料であることが収集の条件となっています。今回は、玉川学園に長く居住し、開館のきっかけになった遠藤周作の資料ということで、購入検討対象となりました。

ホームページで当該資料が売りに出ていることが分かるとすぐに古書店に連絡し、現物を見るために神田神保町へ足を運びました。原稿用紙三二枚に及ぶ資料のため、抜けや欠

損がないかを確認。ひとつネックだったのは、和綴じ処理されていたこと。原稿は、作家本人の意向によって製本される場合もありますが、遠藤が自身の原稿を製本した例は目にしたことがありません。古書店の担当者によると、二〇年くらい前までは原稿をこのように製本処理するのが好事家の間で流行していたということなので、おそらく旧蔵者によって施されたものと考えられます。製本化された原稿用紙を展示する場合、開いた一部分しか見せられない上に、その状態で一定期間固定すると開き癖がついてしまい資料に負担がかかるため、展示には不向きです。ただ、状態を見てみると、ばらすことができそうだったので、購入したら解体して本来の状態に戻して保存することになりました。

作品の自筆原稿は高額となるため、職員の判断だけでなく、有識者からもご意見を伺った上で購入を決定しています。今回の場合は、二人の研究者の方から、①中間小説ではあるが、所々に死と隣り合わせの不安、院内の描写等、遠藤自身の経験が投影された作品であること ②近年、遠藤の小説原稿が売りに出されることは少なく、貴重なものであること ③全編揃いであり、資料の状態が良好であること という点から町田で購入すべき資料であるというお墨付きをいただきました。

和綴じ本の解体と資料の保存

て支障をきたしたりするものではないため、あえて修復しないことにしました。

バラバラにした原稿は一枚ずつ、不活性のプラスチックであるポリプロピレン（PP）製の袋に入れた上で、特注の中性紙製の保存箱に収めて管理しています（図4）。なぜ中性紙の箱をわざわざ使うのかというと、紙が酸化して脆くなり、ボロボロになってしまうのを防ぐためです。千年前の絵巻物よりも、百年前の雑誌の方が劣化が激しいのは、和紙が中性紙なのに対し、雑誌に使われている洋紙は、インクの滲みを防ぐ工程で酸性の薬品が使われている酸性紙だからです。現在市販されている封筒や紙箱もほとんどが酸性のものであるため、資料の大半が紙資料である当館では、保存に最も適した中性紙製の保存容器を使用しているのです。

物理的な処理を終えたら、所蔵資料であることを公開するために、図書館システムにデータを登録します。展覧会で公開している当館所蔵資料は、このように一点ずつ適切な処理をした上で、最も望ましい環境に設定した収蔵庫で保管されているのです。

今回ご紹介した原稿は、一階文学サロンにて開催している「ことばらんどお宝紹介」コーナーで初公開します（展示期間…四月二三日～五月一二日）。ぜひこの機会に実物をご覧ください。

（学芸員 杉本佳奈）



図1



図2

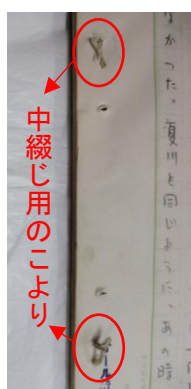


図3



図4



←貴重資料保存庫内での
原稿類の収蔵の様子

諸手続きを終えて資料が館に届いてから、和綴じをばらす作業に入りました。今回施されていたのは、四つ目綴じという最も一般的な方法でした（図1）。まず、綴じ糸を外してから、背の両端の角布と表紙をはがします（図2）。これで表から原稿用紙が見えた状態になります。このこよりを外して一枚ずつにばらしていきますが、角布がついている背の上下の部分は糊付けされてくっついていて破いてしまわないよう慎重に作業を進めました。

解体してみると、原稿の一枚目の端は元から欠損していたのか、製本の際に和紙による補修をしたことがわかりました。一枚目にはセロハンテープを貼った形跡があるため、そこから破れたものと思われる。本作は一九六一年「オール読物」十月号に掲載された作品ですが、この頃の新聞や雑誌に掲載された原稿は、セロハンテープで貼られたりホツキス留め、クリップ留めされたりしたものが散見されます。これらは資料を劣化させる要因になるため、極力外して保存しています。なお、綴じ穴については和紙で繕うこともできますが、これ以上広がったり、展示に際し

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」をもとに作成しています。

『尺翁通信 明治150年 歴史と詩とエッセー』

富成博／著 尺翁通信出版委員会 2018.11 限定300部

富成博

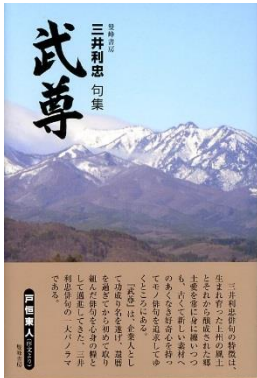
1922年生まれ。61年より歴史に取り組む。72年詩誌「駱駝」参加。著書に「高杉晋作・詩と生涯」、詩集に「恩田川のほとりから」などがある。96年より町田市在住。

東京龍馬会機関誌「龍馬タイムズ」に連載されたエッセー「小萩の露」を序章に、史伝、エッセー、詩などをまとめた作品集。
幕末のさまざまな出来事が大変分かりやすく書かれており、更なる興味へと導かれる。長い年月、研究を重ねてきた人ならではの、かみ砕かれた歴史観、人生観と文章の練達を感じられる。



『武尊 三井利忠句集』

三井利忠／著 雙峰書房 2019.1



タイトルの「武尊」は「ほたか」と読む。著者の故郷、群馬の百名山の一つ、武尊山を詠んだ句から採っている。会社定年後に俳句を始め、十年に満たない間に結社の大賞を受賞、第一句集の本書を上梓した。目覚ましい飛躍ぶりである。豊かな風景を詠んだ句が多く、清々しい句集である。

三井利忠

1944年生まれ。2010年「春月」入会。11年春月新人賞選者賞、18年春月コンクール大賞を受賞。町田市在住。

【主な寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」

詩誌：「璞（あらたま）」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「蓍（こだま）」

「都市」「風土」「波」「俳句界」

「蒼茫（そうぼう）」「八千草」

その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」をもとに作成しています。

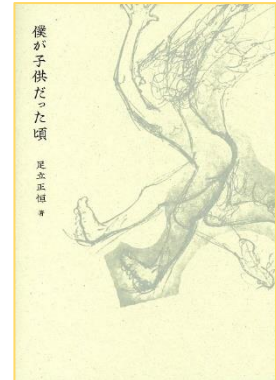
「ウィッチンケア」 vol.10
多田洋一／制作責任 2019.4



「すすめ！インディーズ文芸創作誌！」のキヤッチコピーを冠した（書いてあるのは本誌の下のほうだが）「ウィッチンケア」の一〇号。当館短編小説実作講座講師ナカムラクニ才氏、みつはしちかこ展にご登場いただいたトミヤマユキコ氏などが執筆。今号も多彩な作品が並ぶ。「最も孤独な長距離走者―橋本治さんへの私的追悼文」には知られざる橋本の生前の姿が描かれ、改めて橋本の偉大さを思う。

多田洋一
編集者・作家。
2016年より当館運営協議会委員を務めている。町田市在住。「ウィッチンケア」は5号より町田で編集制作。

『僕が子供だった頃』
足立正恒／著 2019.2



傘寿を記念して、家族に勧められ編んだエッセー集。父が戦死したかと思われたこと、山間部へ疎開したこと、そして占領下の子どもたち、新しい憲法の発布など激動の時代に、子どもながらつづさに周りの出来事を見ていたまなざしの確かさが伝わってくる。「少年義勇兵・島倉健吾さん」の一文は心を打つ。これによって、名もなき一青年は私たちの記憶に残り続ける。

足立正恒
1938年生まれ。幼児期を新潟市、小中学校を上越市で過ごす。町田市在住。

展覧会開催中

- 観覧時間
10時～17時
- 休館日
毎週月曜日
(ただし 4/29、5/6
は開館)
第2木曜日
- 入場無料



6月30日(日)まで

- 展示解説
4/23(火)、5/14(火)、
5/25(土)、6/11(火)、
6/30(日)
14:00～(40分程度)
申込不要

〈貴重雑誌をめぐる物語〉

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八三〇タイトル、一万冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

その二

短歌誌 「伊志布美」

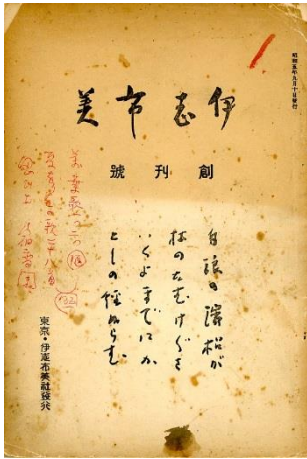
編者…松本良隆（のち下村栄安）

発行所…伊志布美社

刊行頻度…月刊

所蔵巻号…創刊号（一九三〇・昭和五年九月十日）第五巻第六号（一九三五・

昭和十年六月一日）の合計二三冊



「伊志布美」創刊号
1930(昭和5)年9月

誌名は、「いしづみ」と読むのでしょうか。

一九九二（平成四）年、九七歳で没した町田の歌人・下村照路（栄安）が、三六歳の時に創刊した短歌誌（創刊号から九冊目までは松本良隆が編集発行人）です。月

刊が建前でしたが、実際には遅延や長い中断もあり、下村自身の旧蔵になるこの二三冊が、刊行されたすべてではないかと思われます。因みに、この雑誌を所蔵している公的機関は、いまのところ当館以外に見当たりません。

歌壇に一石を投ずる意気込み

創刊号には、北海道から秋田、常陸、東京、静岡、関ヶ原、岐阜、岡山、広島、佐賀と全国の人・誌友が作品を寄せ、号を重ねるに従って徐々に会員も増えて、都内や地方に支部が誕生するまでになります。

時おり掲載される「消息」欄によれば、「○君、病氣も全治して目下卒業試験準備中」

「××君、宇都宮野砲第二十連隊幹部候補生として入隊」「△△氏、教子たる高輪商業学校生徒二百名を引率して筑波霞ヶ浦に旅行す」などがあり、会員には学生や若い教員などが多く、最初の編集発行人である松本良隆なる人物もそうした中の一人でした。

消息をたどると、松本には後年『歌集南十字星』（一九八四年・私家版）の著書があり、下村が寄せた序文や同書の年譜から、下村の妻の弟に当たった人物で、当時東洋大学の学生だったことが分かります。

「伊志布美」が創刊された当時は、明治、大正以来歌壇の主流を占めてきた、いわゆる万葉調の「アララギ」系短歌に対して、口語派やシュールレアリズム、プロレタリア短歌などの新興歌人グループが興り、歌壇の革新運動が盛んに展開された時期でした。創刊号巻頭に掲げられた下村の「万葉の歌一つ二つ」という文章には、こうあります。

「口語歌であるとか、或は万葉調であるとか、又は、プロレタリアの短歌であるとか、小うるさいことを言つても、その内容に於て、その精神感情に於て適切でないものを何うして良い歌であると言ひ得ようか。芸術品に、イデオロギーがあらうがあるまいが、プロレタリアの歌であらうが、将た又、ブルジョアの歌であらうが作者個々の思想感情の如何にあるのであつて初めから、そうした□□□（引用者注…欠字）あてはめて作るうなど考へることが已に、作歌態度の前提に誤りがあると私は断言して憚らない。」

下村は、当時すでに若山牧水の「創作」を経て同系誌「ぬはり」の同人となつていましたが、若い人びとを率いて歌壇に一石を投げ

ようにする、意気込みのようなものが感じられます。

九〇年の歴史を引き継ぐ地

各号には、同人たちによる短歌、作品批評、歌論のほか、歌会報告なども載っています。

一九冊目（第四卷第三号・一九三三・昭和八年三月十日）には、前月町田で開催された歌会記録「春期短歌会記」があり、集合写真と共に、当日の模様を伝えていきます。生憎の荒天で地方からの参加者が定刻に集まらず、迎える下村の落ち着かない様子が描かれ、ようやく皆が揃って「いよいよ会場である町田町公会堂につめかけ」ます。この公会堂こそ、原町田の有志が住民のために一九三二（昭和七）年頃に建設し、その後町田町が譲り受け、戦後初の社会教育施設として町立公民館を設置し、さらに町田市立公民館から、現在の市民文学館へと引き継がれた場所なので



下村照路 (栄安)

1894(明治 27)～
1992(平成 4)

二〇冊目（第五卷第一号・一九三五・昭和一年一月三〇日）の「町田短歌会々報」にも、「昭和九年十二月八日夜於町田公会堂」とありますから、文学館のあるこの地は、約九〇年前から今日まで、町田市民がずっと文学活動に勤しんで来た場所だと分かります。

参加者には、創刊号から毎号必ず病中吟や吾子・夫への思慕を詠った作品を寄せている「波留女」の名もあり、おほかたの支拂終へぬと夫の言ふ言葉あかるし、けさの目覺めに一首が当日の作として記録されています。

妻の追悼号が終刊号に

「波留女」とは下村の妻女、先の松本良隆の姉でもある波留子のこと、結婚以来ともに作歌に励んでいました。しかし、長患いの末、歌会から僅か半年後の一九三五（昭和一〇）年、三人の子と下村を残して他界します。

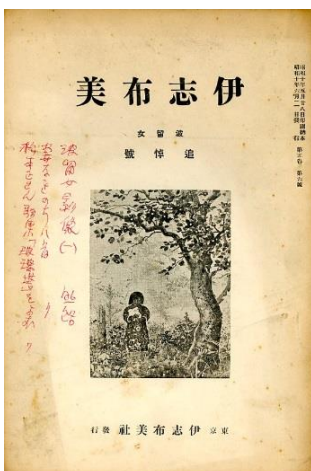
「伊志布美」第五卷第六号（一九三五・昭和一年六月一日）は「波留女追悼号」で、見返しに「波留女小影」を掲げ、遺稿一八首を巻頭に、知友による追悼文や哀悼歌六八首が収められています。下村が寄せた八首のうち冒頭の一首だけをご紹介します。

さよあらし硝子窓鳴らしすさぶ夜を
ろふそくともす、みたまの前に

「追悼号」の編集後記には、「妻に死なれて五十日になる。うつつとして楽しまない日のつづくことよ。この編集も矢張り、やうやく仕上げるほどの氣力しかなかったため、至るところ缺点だらけだらうと思ふ」とあり、続けて、次号は『からす貝』の批評号にしたい、と記されています。『からす貝』は、奇しくも波留子の没した月に出来上がった下村の第二歌集ですが、予告された次号は、ついに刊行されず、「追悼号」が事実上の終刊号となったようです。

下村はその月のうちに、愛妻を失った哀しみを振り払うかのように、当時世田谷に住んでいた北原白秋を直接訪い、結成されて間もない「多磨短歌会」への入会を懇請して、許されます。以降、白秋門の歌人として晩年まで研鑽を積みながら、町田で「かがりび短歌会」を主宰し、傍ら町田を中心とする郷土史の研究者として、地域文化の発展に尽力することになります。

「伊志布美」追悼号
1935(昭和 10)年 6 月



ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

ミニ展示

遠藤周作 「共犯者」 自筆原稿展

4月23日(火)～5月12日(日)



らんちゃん
©中垣ゆたか

ミニ展示

かみくらうつわ

神蔵器展

5月14日(火)～7月7日(日)

2019年度お宝紹介展示（サロン）今後の予定

(原稿・原画保護など諸般の事情により変更される場合もあります)



ことくん
©中垣ゆたか

- 遠藤周作「共犯者」自筆原稿展 (4/23～5/12)
- 神蔵器展 (5/14～7/7)
- おぼまこと展 (7/9～9/29)
- 西村宗「サラリ君」展 (10/1～12/28)
- 作家の手紙展 (2020/1/5～3/15)
- わたなべゆういち絵本原画展 (3/17～)

「町田の文学」第42号 2019年5月1日発行

編集・発行／町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida_kotoba



*この冊子は350部作成し、1部あたりの単価は186円です(職員の人件費を含みます)